

四条金吾殿御返事

弘安二年四月二三日 五十八歳

なによりも人には不孝がを^恐そろしき事に候ぞ。との^殿ゝ^兄あにをとゝは、われと法華經のかたきになりて、との^離をはなれぬれば、かれこそ不孝のもの、との^身ゝみにはとがなし。を^女うなるいどもこそ、との^類ゝはぐくみ給はずば一定不孝にならせ給はんずらんとをぼへ候。所領もひろくなりて候わば我が^領りやうえも下しなんどして一身すぐるほどはぐくませ給へ。さだにも候わば過去の父母定んでまぼり給ふべし。

日蓮が^祈き^請せいもいよいよかない候べし。いかにわるくとも、きかぬやうにてをはずべし。この事を^見み候に申すやうにだにも^触ふれまわせ給ふならば、なをなをも所領もかさなり、人のをぼへもいできたり候べしとをぼへ候。さきざき申し候ひしやうに、陰徳あれば陽報ありと申して、皆人は主にうたへ、主もい^和かん^殿ぞをぼせしかども、わどのの正直の心に主の後生をたすけたてまつらむとをもう心^強が^盛う^数じ^年やうにして、すねんをすぐれば、か^利かる^生りしやうにもあづかせ給ふぞかし。此は物のはしなり。大果報は又来たるべしとをぼしめせ。

又此の法門の一門いかなる本意なき事ありとも、みず、きかず、いわずしてむつばせ給へ。大人にいのりなしまいらせ候べし。上に申す事は私の事にはあらず。外典三千、内典五千の肝心の心をぬきてかきて候。あなかしこあなかしこ。恐々謹言。

卯月二十三日

日 蓮 花 押

御 返 事